

意味表示における受身構文：一試案

井上 和子

0. はじめに

受身構文の統語的分析は、生成文法の初期より現在に至るまで、常に中心的な議論の対象となってきた。本稿は、概念構造における *Be* 受身の表示に関して、一つの提案を行なう。また、それとともに *Have* 受身、状態受身、反意的付加詞 *On* などの構文との関係を説明し、これらの構文に共通する「受身」的意味がどこから来るのか明らかにしようとする試みである。

本稿では、(1a)のような受身文は、(1b)のように意味表示されることを提案する。

(1) a. Bill_i was kicked by John.

b. [Event INCH([State BE([Event KICK([Thing JOHN], [Thing α]),
[Place AT([Thing BILL_i]*)])])])]

(1b) が表わしているのは、単一の項 (argument) として function BE をとる function INCH(OATIVE) の構造を成している。function BE の第一の項である Theme は [JOHN KICK BILL] という能動態の clause を、二番目の項である Location として第一の項の clause の目的語と同一の BILL を、それぞれとる構造である。Inoue (1995) において、(2a, b) のような受身的な意味をもつ *have* 構文¹ に関して、(3a, b) のように意味表示されることを論じた。これらは、(1b) と同形の (isomorphic) 構造である。

(2) a. John_i had his car_j break down.

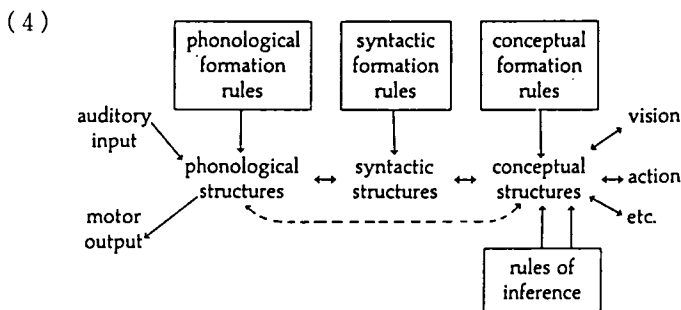
b. John_i had his savings_j wiped out.

- (3) a. [Event INCH([State BE([Event JOHN_i'S CAR_j BREAK DOWN],
[Place AT([Thing JOHN]_i)])])])]
 b. [Event INCH([State BE([Event JOHN_i'S SAVINGS_j BE WIPED
OUT], [Place AT([Thing JOHN]_i)])])]²

まず、§1において、ここでの議論の基になっている意味理論の枠組みについて簡単に概説する。§2においては、*be* 受身と *have* 受身の概念構造における相違、*be* 受身が (1b) の構造をもつ論拠、統語構造への結びつき (link-ing) について論じる。結びとして、§3では、状態動詞の受身文、反意的付加詞 *on* をとる構文との関係について言及する。

1. 意味理論の枠組み

本稿が採用している意味理論は、その概要において Jackendoff (1976, 1983, 1990) の理論を基盤としている。従って、意味表示を扱う概念構造がその一部を成す文法全体は、(4) のように図示される。



(Jackendoff (1990: 16))

しかしながら、Jackendoff とは意見を異にしているのは、‘Action tier’ の採用においてである。Jackendoff (1990) は、従来からの Thematic Relations を取り扱う概念構造である ‘Thematic tier’ とは別個に、Actor-Patient の概念を扱う ‘Action tier’ を設けている。彼はこれら 2 つの概念を表示するものとして、AFF(ect) という関数を立てている：

$$(5) \quad [\text{Event}] \rightarrow \left[\begin{array}{c} \dots \\ \text{AFF}(\langle [\text{Thing}] \rangle, \langle [\text{Thing}] \rangle) \end{array} \right]$$

この関数により、Actor と Patient は、以下のように表示される：

- (6) a. [AFF([X], [])] (X=Actor only)
- b. [AFF([], [Y])] (Y=Patient only)
- c. [AFF([], [Y])] (implicit Actor)
- d. [AFF([X], [])] (implicit Patient)

これらの概念を識別するテストとして、(7)のようなものを挙げている：

- (7) a. What happened to Y was ...
- b. What X did to/for/with Y was ...

(7a, b)における Y が Patient であり、(7b)における X が Actor であるとされる。また、Jackendoff が Action tier を立てたのは、統語的項 (syntactic arguments) と意味的項 (semantic arguments) との結びつきを統一的に説明するためであった。意味的項に関しては、次のような階層 (hierarchy) を設けている：Actor > Patient > theme > location, source, goal。また統語的項に関しては、次のような階層を設定している：subject > 1st object > 2nd object。

この問題に関する詳しい議論は Inoue (1995) に譲るが、採用しない理由としては、まず、“affectedness” という概念の不明確さである。とりわけ、Patient の概念に関しては、上記のテストでは、非常に弱い。その一例として、動詞 *approach* の以下の文を見てみよう：

- (8) a. What happened to me was that the stranger approached me.
- b. ?What happened to me was that a car approached me.
- c. *What happened to me was that the train approached me.
- (9) a. What the stranger did to me was approach me.
- b. ?What the car did to me was approach me.
- c. *What the train did to me was approach me.

はたして、上記の場合、*approach* の目的語の *me* は、Patient と言えるで

あろうか。³

‘Action tier’を採用しない第二の理由は、統語的項と意味的項との結びつきが常に保証されているわけではないことによる。以下の文に注目してみよう：

- (10) a. What John did to the charity was donate easily traceable
drug money *to it*. (Wescoat (1992: 155))
b. What Bill did to his razor was shave *with it*.
c. What Fred did to the stove was cook *on it*.

(10)のイタリック体の部分は、(7)のテストに適合するが、Patientであるとは言えない。なぜならば、これらは統語的項ではなく付加詞だからである。Jackendoffはこのような場合を“discourse Patients”と呼んで、“grammatical Patients”と区別しているが、両者の間に一線を画すことは困難である。

さて、Action tierを設けないとすれば、それに代わりうる方策はどのようなものだろうか。まず、Actorに関しては、Miller & Johnson-Laird (1976)などに提案されているように、DOというfunctionを導入することで取り扱う：

- (11) [Action DO([Thing X], [E])]

DOの第一の項がActorに相当する。Patientに関しては、抽象的な運動、あるいは、状態変化にかかわっている entity、換言すれば、GOあるいはINCHのfunctionに非動作主的にかかわっている entity、の派生的な意味にすぎないと解釈する。従って、多くの場合 Theme あるいは Goal である要素が、そして時には Instrumental などが、Patient と解釈される。それゆえ、独立したカテゴリーとして立てる必要はないと思われる。また、特に受身の *be* または *have* の構文に関しては、その主語は伝統的に Patient と解釈されるが、次節以降が示すように、その“affected”の意味は主語の NP が補部の Goal であるような構造であるところから来ている。Action tier を用いない統語的項と意味的項の結びつきに関しては、*be* 受

身, *have* 受身との関係で, §2で論ずることになる。

2. Be 受身構文の概念構造について

2.1 *Be* 受身と *Have* 受身の相違について

冒頭において, *be* を用いた受身と受身的意味をもつ *have* 構文が, (1b), (3a, b) におけるように, 基本的概念構造を同じくしていると述べた。では, 両者を識別している特徴とは何であろうか。

Be 受身の概念構造上の特徴の第一は, function AT の項となる要素は, (1b) が示すように, function BE の第一の項である節の中で目的語に link される要素と同一指示でなければならないということである。これに対し, *have* 構文の場合には, そのような制約は見られないが, 一般的には, (2a, b) が示すように, 同一でないものが好まれる。⁴

be 受身文のもう一つの特徴は, function BE の第一の項である Event を構成する function は, CAUSE または DO でなければならないということである。一方, 過去分詞をとる *have* 構文の場合, Event は *be* 受身文に相当する構造であるので, highest function は INCH である。また, 不定詞をとる *have* 構文では, Event は次の (12) の両文のように INCH の場合も, DO の場合もありうる:

(12) a. John had his car break down.

[INCH([BE([INCH([BE([HIS CAR], [AT([DOWN]))]),
[AT([JOHN]))])])])]

b. John had his employee steal the money.

[INCH ([BE ([DO ([HIS EMPLOYEE], [HIS EMPLOYEE
TAKE THE MONEY UNLAWFULLY]), [AT ([JOHN])]))]]

逆に, *have* 構文を特徴づける点は, AT の項は, Animate (なかでも Human) な要素に限定されるということである。無生物が主語になることはない:

- (13) a. *The house had its roof broken.
 b. *The car had its engine break down.

2.2 *Be* 受身の意味表示に関する論拠

Be 受身が (1b) であるとする論拠には、次のようなものが挙げられる。まず、主語の NP が Goal であり、Event が Theme であるとする点に関してである。以下の文における *get* (または *receive*) が受身の意味をもつことに注目したい:

- (14) a. John got a spanking from his mother.
 (= John was spanked by his mother.)
 b. John got a kick from Mary.
 (= John was kicked by Mary.⁵)

get は、主語の NP が Goal 目的語の NP が Theme であるタイプの動詞である。すなわち、(14a) では John が Goal であり spanking という Event が Theme である。*be* 受身文の概念構造を (1b) のように考えるならば、*be* 受身文と (14a, b) のような *get* 文及び *have* 受身にも共通した「受身」の意味を表示することを可能にするものである。

さらにこれを強めるのは、すべての *have* 構文及び (14) の *get* は、受身にならないことである:

- (15) a. *An interesting book was had by John.
 b. *His savings were had wiped out.
 c. *His car was had (to) break down.
 d. *Bill was had (to) wash the car by John.
 e. *A spanking was got by John.

三番目の論拠は、いわゆる “unpassives” に関係している。次の (16) の a と b の対比に注目してみよう:

- (16) a. The president's blunder went unreported in the press.
 b. *The president's blunder got unreported in the press.

a と b の相違はどこから来るのであろうか。動詞 *go* と *get* の Thematic Relations の違いから来ると思われる。*go* の場合、主語の NP が Theme であり、‘unreported in the press’ という状態が Goal ということになる。一方、*get* の場合には、主語の NP が Goal であり、‘unreported in the press’ が Theme である。では、何故 ‘unreported in the press’ が Theme の *get* は非文となるのであろうか。答えは簡単である。「Theme がある事柄がない状態に至る」ということはあり得ても、逆に「ない状態が Goal に至る」ということはあり得ない。Theme は存在するものでなければならぬからである。同じことは、状態受身文、*be* 受身文についても当てはまる。(17a) の文は、(17b) と異なり、状態受身の意味しかもち得ない。これは、c, d が示す通りである：

- (17) a. The presiden’s gaffe was unpublicized.
 b. The presiden’s gaffe was publicized.
 c. *The presiden’s gaffe was enthusiastically unpublicized.
 d. *The presiden’s gaffe was being unpublicized.

(17a) の状態としての読みが成り立つということは、この場合、(16a) と同様、主語の NP が Theme で、‘unpublicized’ が Location ということの意味する。決してその逆ではあり得ない。(18) が示す通りである：

- (18) a. *John has unemployment.
 (Cf. John is unemployed.)

すなわち、「無いもの(状態)がジョンの所にある」ということは、あり得ないからである。状態受身の読みに対して、状態変化としての読みが成り立たないということは、とりもなおさず、通常の受身文は、NP が Goal であるような概念構造であるということを示唆している。⁶

四番目の論拠は、動詞 *rent* (*lease*) に関係している。*rent* (*lease*) は、その主語が Goal である用法も Source である用法も存在する：

- (19) a. John rented (leased) the house to Mr. Smith.
 b. John rented (leased) the house from Mr. Smith.

Inoue (1995)において、これらの動詞が *have* 使役の補部に過去分詞として埋め込まれた(20)の文では、(19a)の読みしかもないことを指摘した：

(20) John had the house rented (leased).

この理由としては、移動関係のある動詞が過去分詞として補部に埋め込まれた場合、母型文の動詞の移動とは反対の方向のものが好まれるからである。(21)の受身文においても、(19a)の読みの方が強い：

(21) The house was rented (leased).

このことは、傍証ながら、(1b)の構造を裏付けるものである。

(1b)におけるように、対応する能動文とは異なる概念構造を設けることを支持するのは⁷、能動文と対応する受動文とでは意味に差がある場合があることである。よく知られている(22)、(23)の例文がそれにあたる：

(22) a. Everyman in this room speaks two languages.

b. Two languages are spoken by everyman in this room.

(23) a. *Einstein has visited Princeton many times.

b. Princeton has been visited by Einstein many times.

(22a)は、「誰もが話す二ヶ国語は特定のものであるとは限らない」ということを意味するのに対し、(22b)は、「誰もが特定の二ヶ国語を話している」ということを意味する。また、(23a)は、現在完了形の表層上の主語に来るものは、現存していなければならないという前提があるので、容認されない文となっている。数量詞の特定性(specificity)、完了形のいずれも、概念構造においてどのように意味表示されるか、明らかとなっていない。従って、(22b)、(23b)どちらも基本的概念構造のみを表示すると以下のようになる：

(22b') [Event INCH([State BE([Event SPEAK([Thing EVERYMAN IN THIS ROOM], [Thing α]), [Place AT([Thing TWO LANGUAGES] α))])])])]

(23b') [Event INCH([State BE([Event VISIT([Thing EINSTEIN], [Thing α]), [Place AT([Thing PRINCETON] α))])])]

(22b), (23b) とともに, (22b'), (23b') のように, 主語の NP が, 能動文に相当する命題の中とは別個に, function INCH-BE の関数構造の Location の位置にある構造を仮定するならば, 説明は容易である。(22b') の二ヶ国語は, 「特定の位置」にあるものだからであり, (23b) は, (23a) とは異なり, 現在完了の前提は, “Princeton” に対してなされているからである。

Theme として能動文を含んでいる論拠としては, 受身文が以下のような動作主指向の付加詞をとりうるものが挙げられる。

- (24) a. The knives were sharpened *cautiously*.
 b. John was killed *with a knife*.
 c. A dam was built *in order to produce electricity by water power*.

この種の付加詞類は, Jackendoff (1983,1990) によるならば, 意味表示のレベルでは, Head の LCS(語彙的概念構造)の中の従属的構造として表示されることになる:

- (25) a. John went home quickly.
 b. $\left[\begin{array}{l} \text{GO}([\text{Thing JOHN}], [\text{Path TO}([\text{Place HOME}]]) \\ \text{Event} [\text{Property/Manner QUICK}] \end{array} \right]$

従ってこの種の付加詞類が受身文にあっても, 能動文における場合と同じ意味関係を保持しているとするれば, それはとりもなおさず, 受身文の意味表示において能動文と同じ節構造が存在することを示すものである。

2.3 統語構造との結びつき

さて, *be* 受身の概念構造を (1b) とする時, (1a) の統語構造にどのような連結されるのであろうか。Inoue (1995) は, *have* 構文に関して, 以下の (26), (27) のような連結規則を提案した。(26) は主語への連結, (27) は目的語への連結に関するものである。

- (26) a. 命題中の State/Event function の最初の項は, その関数が唯一の項として命題をとらない場合のみ, 対応する節の主語に連結される。命題をとる場合は, 最も浅く埋め込まれた関数の最

初の項が主語に連結される。

- b. 命題中の BE, INCH-BE, GO のいずれかの関数の項である Place/Path function は、その項が有生または定 (definite) である時のみ、対応する節の主語に連結される。

(27) a. function CAUSE または DO の二番目の項は、目的語に連結される。その二番目の項が命題である場合には、(26a) または (26b) の規則でその命題の主語に結びつけられた項が、母型文の目的語に連結される。

- b. (26b) によって、その Place/Path の項が主語に結びつけられた function の第一の項(すなわち, Theme)は、目的語に連結される。その Theme の項が命題である時は、その命題中の主語に結びつけられた項が、母型文の目的語に連結される。

- c. 動詞に語彙的に編入された Place または Path function の残りの項は、目的語に結びつけられる。

これらの規則は最も深く埋め込まれた命題から適用され、順次最も上位の時制をもつ命題へと至る。(26a), (26b) の規則は、一方の規則が適用される時には、もう一方の規則は適用されることはないという点で、相互に排除しあうものである。a の規則はあらゆる状態、状態変化、使役、行為に関わる function の最初の項の主語への連結を説明するものである。それに対し、b の規則は、状態、状態変化を意味するすべての *have* 構文に見られる Location / Goal の項の主語への連結を説明するものである。また、(27b) は、(3a,b) 構造におけるような Theme の目的語の位置への結びつきを確保するものである。

さて、*be* 受身文の場合には、どのような連結が行なわれるのであろうか。まず、最も深く埋め込まれている能動文に相当する概念構造には、(28) のような 'Past Participle Correspondence Rule' と (29) のような 'Passive By Adjunct Rule' が適用される。⁸

(28) Past Participle Correspondence Rule

V-*en* corresponds to [CAUSE / DO([X], [EVENT])] if x is unindexed.

(29) Passive *By* Adjunct Rule

If X in [CAUSE / DO([X], [EVENT])] is unindexed and an overt argument, then X may correspond to the NP in [VP V-*en* ... [pp by NP]...]

そして、それより上位の function BE の構造においては、*have* 構文と同様、(26b) の規則が適用され、さらに function INCH の構造においては、(26a) の規則の第一の項として命題をとる場合が適用され、最終的に (1b) の BILL が主語に結びつけられることになる。

3. 結び

§2において、*be* 受身文が(1b)のように、*have* 受身と同形の構造をもつ論拠、それとともに両者を識別している特性、および両者の統語構造への結びつきについて論じてきた。

最後に、*be* 受身と関連の深い状態動詞の受身構文及び反意的 *on* について言及しておきたい。まず、(30a) のような状態動詞の *love* の受身文の概念構造は、(30b) のようであると考えられる：

(30) a. Mary_i is loved by John.

b. [State BE([State LOVE([Thing JOHN] , [Thing α])], [Place AT([Thing MARY]_i α)])]

これはちょうど、状態変化としての受身の *have* が対応する (31) のような状態構文をもつのに相当すると考えられる：

(31) John has his teeth broken.

また、反意的付加詞 *on* をとる (32) のような構文の概念構造に関しては、Inoue (1994) において (33) のように (1b) 及び (3a,b) とやはり同形の構造として表示されることを論じた：

(32) John's car broke down on him.

(33) [Event INCH([State BE([Event JOHN_i'S CAR BREAK DOWN],
[Place ON([Thing JOHN_i)])))]]

(33)が前二者と異なるのは、(33)は Adjunct Rule により導入された構造であるのに対し、前二者は項構造 (argument structure) であるという点である。

本稿で行なってきた *be* 受身文の概念構造に関する主張は、未だ speculation の域を出ておらず、十分な議論をされなければならない多くの問題を残している。しかしながら、その主張が妥当なものであるとするならば、いわゆる「受身」的な意味は、[INCH([BE([EVENT], [AT([X])])])] の構造として捉えることができるということになる。これは単に英語の受身構文のみならず、日本語の受身構文にも適用できる普遍的性格をもっていると思われる。

[注]

1)以後、この構文を *have* 受身という。

2)Inoue(1994, 1995)と notation において異なるのは、統語構造の項と概念構造の項同士を結ぶ index としては、 i, j 等を用いるのに対し概念構造での項同士を結びつける場合は、 α, β 等を用いて、両者を区別した点である。

3)評者の一人よりこのあたりの議論について、評者の提案する線に沿って、修正をするよう要請があった。しかしながら、その線は“grammatical Patient”がアプリアリな概念であるとする評者の考えに基づくものである。筆者が提案された線に沿った修正を加えなかつたのは、アプリアリな概念ではないとする筆者の考えによるものである。

4)例えば、同一であるのは、次のような場合である：

(i) John_i had his wife wake him_i up.

5)ここで使われている“=”は、ほぼ同義という意味で使われているのであって、同一という意味ではない。

6)(16b)が非文であるのは、*get*の主語が有生の名詞句でないことによると解する向きもあるので、有生の名詞句を主語にとる以下の二文でも(16)と同様の相違が見られることを記しておきたい：

- (i) a. The president went uncriticized with respect to his blunder.
 b. *The president got uncriticized with respect to his blunder.

また、評者の一人から、‘The candidate got no support from his party in the election’ という *get* 文においては、ない状態が Theme として Goal に至っているのではないかとの指摘があった。しかしながら、この文の場合には、‘The candidate got some support from his party in the election’ という命題全体が否定されているのであって、Theme 自体が「ない状態」なのではない。

ここでの主張は、無も有の一つ、「空集合も集合の一つ」という考え方と対立するものであることは確かである。しかしながら、自然言語の否定を論理学における場合と全く同じに扱えるという保証もないこともまた事実である。今後さらに検討していくべき問題の一つである。

7)なお、Jackendoff (1990: 179)においては、能動文と受動文は同一の概念構造で表わされ、両者の違いは、統語構造との indexing の違いとしている。

8)状態動詞 *like* などの受身文にも拡大するとすれば、これらの規則は、‘CAUSE /DO / BE の最初の項が unindexed である時’ という条件に修正されることになろう。

REFERENCES

- Gruber, Jeffrey S. 1965. *Studies in Lexical Relations*. Doctoral Dissertation, MIT. Reprinted as part of *Lexical Structures in Syntax and Semantics* (1976). North-Holland, Amsterdam.
- 井上和子. 1992. 受身の *Have* と使役の *Have*. *Conference Handbook Nov. 1992*: 114-117. English Linguistic Society of Japan.

- 井上和子. 1994. 反意的 *On*: 概念構造における付加詞類の一分析. 言語文化研究 20: 177-193.
- Inoue, Kazuko. 1995. Causative *Have* and Experiential *Have*. *English Linguistics* 12: 73-95.
- Jackendoff, Ray S. 1976. Toward an Explanatory Semantic Representation. *Linguistic Inquiry* 7: 89-150.
- Jackendoff, Ray S. 1983. *Semantics and Cognition*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray S. 1987. The Status of Thematic Relations in Linguistic Theory. *Linguistic Inquiry* 18: 369-412.
- Jackendoff, Ray S. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press, Cambridge, MA.
- McCawley, James D. 1971. Tense and Time Reference in English. Charles J. Fillmore and D. Terence Langendoen eds., *Studies in Linguistic Semantics*: 97-113. Holt, Rinehart and Winston, Chicago.
- Miller, George and Philip Johnson-Laird. 1976. *Language and Perception*. Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Siegel, Dorothy. 1973. Nonsources of Unpassives. *Syntax and Semantics* 2: 301-317. Taishukan, Tokyo.
- Wescoat, Michael T. 1992. Review Article: *Semantic Structures*, by Ray S. Jackendoff, MIT Press, Cambridge, MA, 1990. *Studies in English Literature*, English Number, 150-156.

Toward the Semantic Representation of the Passive Construction

Kazuko INOUE

The purpose of this paper is to argue that the conceptual structure of the *be*-passive construction as in (1a) should be represented as in (1b):

- (1) a. Bill_i was kicked by John.
 b. [Event INCH([State BE([Event KICK([Thing JOHN], [Thing α]]),
 [Place AT([Thing BILL_i] α)])])])]

The conceptual structure (1b) is isomorphic to that of the *have*-constructions with a passive sense (hereafter “*have*-passive”) such as (2), as proposed in Inoue (1995):

- (2) a. John had his savings wiped out.
 b. John had his car break down.

The former structure is identical to the latter in that the subject NP is the goal to which Theme X moves, i.e. the place where an event as Theme ends.

Section 1 is devoted to a brief survey of the framework upon which the present study is based. The framework basically follows Jackendoff (1990) without the adoption of the ‘Action tier’. Section 2 is made up of three subsections. Section 2.1. discusses what semantic characteristics differentiate the *be*-passive from the *have*-passive. Section 2.2. presents arguments for the structure (1b). Section 2.3. deals with a tentative formulation of the structural linking of conceptual structures to their syntactic structures without the ‘Action tier’ regarding the *be* and *have* passive constructions.

It follows from the discussion that if the present analysis is valid, the “affected” sense conveyed by *be*-passive, *have*-passive and adverbial *on* adjunct constructions comes from the common structure: [INCH ([BE ([EVENT], [AT([Y])])])]